



## O-4 慢性疼痛を抱えた事例に対する作業に基づく関わり ～作業機能障害と首尾一貫感覚に着目して～

○松本 周三<sup>1)</sup>

1) 鳥取県中部医師会立三朝温泉病院

Keywords: 作業, 作業機能障害の種類と評価, 自己効力感

### 【はじめに】

慢性疼痛を抱える事例に対し、作業に基づく関わりを行った結果、作業機能障害の改善に至った。慢性疼痛に対する作業療法介入の可能性を感じたため報告する。なお、発表にあたり同意を得ている。

### 【事例紹介】

70代女性。約1年半前に両足指部の痛みや異常感覚を自覚し、いくつか病院を受診した。約3ヵ月前に他院で左足部の神経剥離術を受けたが症状は改善せず、X年Y月に当院を受診し慢性疼痛に対する入院加療となった。痛みはVASで10/10だったが身体機能面に問題はなく、FIMは122/126点（運動89点/認知33点）であった。病室では、表情は暗くほぼ休んでおり、他患との会話はなかった。スタッフとの会話はほぼ痛みに関する内容であった。

### 【作業療法評価】

人：県外出身。20代半ばに結婚。30歳頃に2人目を出産した後精神的に調子を崩し、ゆっくりと過ごすことを考え30代半ばにA県へ移住した。移住後は専業主婦となった。40代半ばに義母が亡くなり、精神的に調子を崩し、精神科に入院し全般性不安障害の診断を受けた。50代半ばにも数日の入院をしたが、以降は状態が改善し、定期的な外来通院と内服薬でコントロールできていた。性格として、些細なことも気になると解決するまでこだわってしまう様子があった。

作業：役割は主婦。家事全般を担っていた。しかし、両足部の痛みが出現した後は、寝て過ごすことが多くなり、夫に任せることがほとんどであった。花を育てたりしていたが、それも止めてしまっていた。環境：夫との二人暮らし。夫は事例に対して理解があり、家事のサポートをしつつ、事例にも体力が落ちないように行動することを勧めていた。

作業機能障害の種類と評価（以下CAOD）は74/112点（作業不均衡：18/28点、作業剥奪：21/21点、作業疎外：19/21点、作業周縁化：16/42点）、首尾一貫感覚（以下SOC）をSOC-13で評価すると25/91点（把握可能感：5/35点、処理可能感：10/28点、有意味感：10/28点）であった。

事例からは「本当は主人に迷惑をかけたくないんです。でも実際に家事をしていくとしてどこまでできるかわからない。」と聴取した。

### 【介入方針】

痛みで作業従事のコツが減った結果、役割の喪失に陥り、自己効力感が低下しさらに作業従事しなくなったと考えられた。ただ、痛みを伴いながらもできている点もあり、作業従事に対し過剰に自己抑制をしていると思われた。SOC-13よりストレス（現状は痛み）に負けやすい状況と解釈でき、これも拍車をかけていると思われた。SOCは自己効力感との相関があるため、作業従事のコツの提供を試み、自己効力感の向上を図ることとした。

### 【経過】

まず評価結果を事例と共有し、作業従事の必要性を伝え、できそうな作業を探すことから始めた。事例が、とても生き活きと学生時代に音楽（楽器演奏）をしていた話をした点に着目し、音楽に触れる機会を提供した。すると徐々に生活内で音楽に触れる機会が増え休むことが減った。また、自主練習も増加し、生活内の活動量増加にも波及した。また、調理に挑戦することもできた。

### 【結果】

VASは5/10に軽減、FIMは126/126点に向上した。CAODは40点（作業不均衡：10点、作業剥奪：7点、作業疎外：7点、作業周縁化：16点）と改善した。また、SOC-13も50点（把握可能感：18点、処理可能感：16点、有意味感：16点）と改善傾向となった。事例の表情は明るくなり笑顔が増えた。自ら挨拶し話しかけることも増えた。また語りも「料理は夫と一緒に作ることから始めようかな、ゆっくりね。」と前向きなものとなった。

### 【考察】

事例を作業的存在として捉え、作業機能障害の改善に着目したことが奏功した。作業従事による達成経験や言語的説得が、自己効力感の改善に繋がったと考える。また、心理面の変化としてSOCに着目した。SOCは「生きる力」とも言われており、SOCの向上には自己効力感の向上が関与していると報告がある。SOCは改善傾向であり、退院後の在宅生活では前向きに生きていけることを期待したい。